「唯心廻転門」の変遷について

小林 實 玄

「唯心廻転善成門」は華嚴教義のもっとも重要な「十玄門」中の一門であるが、それは『一乗十玄門』において立てられ、『一乗教分記』において終っている説である。この一門について、いまそれに関連する説をもふくめて、その変遷を考えたいと思う。

まず、『一乗十玄門』の「十玄門」の説はほとんどが法順及び智儼の観行に拠って説いているのであるが、この一門は殊にその観行の立場を説いているところである。

即ち、

第九唯心廻転善成門者、此約心説。

所謂唯心廻転者前義教門等並是如来藏清淨真心之所建立。

と説き、十門中の前の諸門はこの一門によって建立される所であるというのであるが、これはまさしく観行の立場であることを示しているのである。

そして、それが、「如来藏真心」の所建立であるというところ

「唯心廻転門」の変遷について（小林）

ころは、他の諸門の一乗の説と異なるのである。

即ち、ここにいう「唯心」の説は、その「如来藏真心」の所建立について、

若善若惡隨心所転故、云三廻転善成。

心外無別境故、云三唯心。

と説くのであり、その隨心所転の善惡に関して「涅槃」と「生死」との「順逆二転」を説くのである。

そして、『華嚴經』に拠るところとして、

心造諸如来。

は順転の説、

三界虚妄但是一心作。

は逆転の説であるとするのであり、ここにおいて、

生死涅槃皆不出心。是故不得定説性淨及与不淨。

というのである。そしてこのことについて、『涅槃經』の

仏性非淨非不淨、淨与不淨皆唯心。

によって、「離心更無別法。」と、「仏性、如来藏」の「唯

「唯心廻転門」の変遷について（小林）

心」を説くのである。

ところが、この「唯心」に関して、さきに説いた「心外無別境故云唯心」について

心外無境界、無塵虛妄見、

という「楞伽經」の説を用いて説くのであり、こゝにその観行の立場がみられるのである。即ち、この説は更に、

若論如来藏性真實淨心説者、此物不動本処、体応十方性恒常転、縦移到他方而常不レ動本処。

というのであり、観行の立場に拠ることは明らかである。

しかも、これに続いて、

是故、雖復七处九会而不レ離寂滅道場。

と説くのであるが、これは『華嚴經』の一乗の立場を語っているものである。

ここにおいて、この唯心廻転門が説くところの「如来藏」の「唯心」に関して注意されるのは、『法界観門』の観の説である。即ち、「理事無礙観」の「事遍於理門」の

得全收而不壞本位。

から進入する、「周遍含容観」中の「通局無礙門」の

全遍十方而不レ動本位

の説であり、ここに却つてこの「唯心廻転門」が観行に拠つてその観行の立場を説くものであることを確かめることができるのである。

ところで、ここには、『華嚴經』、『涅槃經』、『楞伽經』、『維摩經』が挙げられているが、これらは勿論法順、智儼の観行の拠るところである。ところがこれらの『經』説は当時の中国の新しい仏教の観行に共通して依用されているものである。これら共通する『經』説によりながら、しかもそれぞれの観行者がそれぞれ自らの立場を明らかにしたのであり、法順・智儼はその自らの立場をこのような「唯心廻転」の一門をもって、自らの「一乗」の立場を示したのである。

この『一乗十玄門』の「唯心」の立場をうけるものに、智儼の『搜玄記』がある。ただし、『搜玄記』における「十玄門」は一經の所詮の義と説くのではあるが、十門の標目を示すにとどまっている。

ところが、『搜玄記』は右のような「唯心」の立場をうけて、「十地品」の十二縁起観の「一心」に関して論じている。即ち、その十二縁起観に関して「釈義」の一設を設けて説いている「法界縁起」の説がそれである。

『搜玄記』は「十地品」の説について、一乗を三乗に従えて説く「共学」の説であるとするのであるが、従つていま「法界縁起」は「浄法縁起門・染法縁起門」の二門をもって説いているのである。

即ち、その一乗を三乗に従えて説く「縁起」はまず「本有

と修生」とによって説かれるが、いま「浄法縁起」はこの「本有」に「本有と本有修生」とを、「修生」に「修生と修生本有」とを分つ四門をもつて説くのであり、「本有・本有修生」は「性起品」等の説くところであり、「十地品」は「修生・修生本有」の如来蔵を説くものであるとする。

また、「染法縁起」はその如来蔵の「縁起」について、「如来蔵・阿梨耶識」の心識の縁起を論ずるものであり、縁起一心門と依持一心門の二門をもつて説く。即ち、この説は智儼が『起信論』・『地論』・『撰論』等の説く「阿梨耶識」について、自らの「唯心」の説を新しく論ずるのであるが、これは彼の観行の一つである「唯識観」によって説くところである。その「依持一心門」については、

縁起一心染淨即体不_レ分_二別異。此依持門能所不_レ同分_二一也。

という。「縁起一心門」はまた三門を分ち、初めに「真妄縁集門」を説いて『起信論』に依つて「真妄和合の阿梨耶識」を示す。そして、次に「撰本從末門」と「撰末從本門」の二門について、「唯安心作」は『撰論』の

有得不得・見不見等_二故也。

などによって、また「唯真心作」は『經』の「三界虛妄唯一心作」を『地論』の

第一義諦故也

などによって語るのである。ここにおいて、この「唯心」の

「唯心廻転門」の変遷について（小林）

説は『一乗十玄門』の「唯心廻転門」の順逆二転の立場の説であることがしられるが、しかも『經』文については全く逆の立場を示していることが注意されるのである。

智儼には、その他『五十要問答』・『雜孔目』等があるが、このことに関してはほぼ同じ立場にある。

次に、智儼の門の義湘と法蔵とについては、義湘は『一乘法界図』において『搜玄記』の説を出ないが、法蔵は『一乗十玄門』の説をうけて「十玄門」及びその「唯心廻転」に関する新しい論説を示している。

即ち、法蔵はまず『文義綱目』に一經の要を概説するが、その「第十所説法」のところで「十玄門」を示し、その十門について一門の前後を入れ替えるとともに、標事の十義を十門の後に移して論考を加え、

約_二緣義自性_一故有_二唯心門_一也。

と論じている。

次で『一乗教分記』においては、所謂「一乗教の義理分齊」としての「法界縁起」として「十玄門」を説くが、ここでは十門の順列をかなり入れ替えるとともに、「唯心廻転門」についても新たな説を加えている。即ち、

唯心廻転善成門。此上諸義唯一如來蔵為_二自性清淨心轉_一也。

とは、『一乗十玄門』と同じであるが、しかしこれについて、

「唯心廻転門」の変遷について（小林）

一乗の説として、

但、性起具徳故異三乗耳。

と説き、その「性起」の立場について、

然一心亦具足十種徳。如性起品中説十心義等者即其事也。所
以説十者欲顯無尽故如是自在具足無窮種種徳耳。

此上諸義門悉是此心自在作用更無余物一名唯心転等。宜思釈
之。

と論じているが、これは一乗の「唯心」として「性起十心」
を示しているのである。

しかし、この一門はなお、「如来蔵真心」を基本として説
くものである。それは、この「唯心廻転門」が「如来蔵真
心」を基本とする立場を改めることができないことを示して
いるものとしなければならぬのであり、それは所謂観行の
立場であるというほかはないのである。

そこで、このことについて考えるとき、法蔵が次に『華嚴
經』の「一乗」の立場を明らかにするに際して、新しい「十
玄門」を説き、その「新十玄」においては「唯心廻転門」を
除いたことが、そのことを示しているとするのは当然のこと
であろう。

この「新十玄」を説く初めは『華嚴経旨帰』にみられる。
即ち、その「顕経義第七」に説く「十種無礙」では「唯心
門」を除いているのであるが、しかし、それとともに別に

「釈経意第八」に「所因十種」を論じている中、

二、唯心現故。

明一切法皆心現無別自体。是故大小随心廻転即入無礙。

又釈、謂、彼心所現毛端之処、此心於彼現大世界、大小同処互
不相礙。

等とは、所謂「十玄門」の扱るところの観行の立場を論じて
いるものである。

法蔵のこの「新十玄」の説は『探玄記』において確定する
が、『旨帰』と同様「所因」の「各唯心現故」は観行の立場
を示すものである。

更にまた、『探玄記』には、『経』の「十地品」の「依止一
心観」に関する「十重唯識」の説を指摘することができる。
『搜玄記』は「唯識観」のみを説いているところであるが、
『探玄記』は「十門の唯識」を論じてここに「即入無礙」ま
でを論じているのである。ところが、これが観行に扱る説で
あることは、

是約教就解而説。若就観行亦有十重。如三卷華嚴三昧中説。
というところに明らかである。即ち、「新十玄」は「唯心廻
転門」を除くのではあるが、このように別に「所因」として
「唯心現故」を説くことは、「唯心廻転門」が本来このよう
な観行進入の立場をもって立てられたことを如実に示してい
るものであるといえよう。

（竜谷大学講師）